

# 追憶

芥川龍之介

青空文庫



## 一 埃

僕の記憶の始まりは数え年の四つの時のことである。と言つてもたいした記憶ではない。ただ広さんという大工が一人、梯子はしごか何かに乗つたまま玄能で天井を叩たたいている、天井からはぼつぼつと埃ほこりが出る——そんな光景を覚えているのである。

これは江戸の昔から祖父や父の住んでいた古家を毀こわした時のことである。僕は数え年の四つの秋、新しい家に住むようになった。したがつて古家を毀おそしたのは遅くもその年の春だったであろう。

## 二 位牌

僕んぼうの家の仏壇うちには祖父母の位牌いはいや叔父おじの位牌の前に大きい位牌が一つあつた。それは天保何年かに没した曾祖父母そうそふぼの位牌だつた。僕はもの心のついた時から、この金箔きんぱくの黒ずんだ位牌に恐怖に近いものを感じていた。

僕ののちに聞いたところによれば、曾祖父は奥坊主を勤めていたものの、二人の娘を二人とも花魁おいらんに売ったという人だった。のみならずまた曾祖母も曾祖父の夜泊まりを重ねるために家に焚きもののない時には鉈なたで縁側えんがわを叩き壊し、それを薪たきぎにしたという人だった。

### 三 庭木

新しい僕の家には冬青もぢ、榿かや、木斛もっこく、かくれみの、臘梅ろうばい、八つ手、五葉の松などが植わっていた。僕はそれらの木の中でも特に一本の臘梅を愛した。が、五葉の松だけは何か無気味でならなかった。

### 四 「てつ」

僕の家には子守りのほかに「てつ」という女中が一人あった。この女中はのちに「源さん」という大工のお上さんになったために「源てつ」という渾名あだなを貰もらったものである。

なんでも一月か二月のある夜、（僕は数え年の五つだった）地震のために目をさました

「てつ」は前後の分別を失つたとみえ、枕まくらもとの行灯あんどんをぶら下げたなり、茶の間から座敷を走りまわった。僕はその時座敷の畳に油じみのできたのを覚えていた。それからまた夜中の庭に雪の積もつていたのを覚えていた。

## 五 猫の魂

「てつ」は源げんさんへ縁づいたのちも時々僕の家うちへ遊びに来た。僕はそのころ「てつ」の話した、こういう怪談を覚えていた。——ある日の午後、「てつ」は長火鉢ながひばちに頬杖ほほづえをつき、半睡はんすい半醒はんせいの境にさまよつていた。すると小さい火の玉が一つ、「てつ」の顔のまわりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははつとして目を醒さました。火の玉はもちろんその時にはもうどこかへ消え失うせていた。しかし「てつ」の信ずるところによればそれは四、五日前に死んだ「てつ」の飼ねこい猫の魂がじゃれに来たに違ちがいないというのだった。

## 六 草双紙

僕の家の本箱には草双紙がいつぱいつまっていた。僕はもの心のついたころからこれらの草双紙を愛していた。ことに「西遊記」を翻案した「金毘羅利生記」を愛していた。「金毘羅利生記」の主人公はあるいは僕の記憶に残った第一の作中人物かもしれない。それは岩裂の神という、兜巾鈴懸けを装った、目なぎしの恐ろしい大天狗だった。

## 七 お狸様

僕の家には祖父の代からお狸様というものを祀っていた。それは赤い布団にのつた一對の狸の土偶だった。僕はこのお狸様にも何か恐怖を感じていた。お狸様を祀ることはどういう因縁によつたものか、父や母さえも知らないらしい。しかしいまだに僕の家には薄暗い納戸の隅の棚にお狸様の宮を設け、夜は必ずその宮の前に小さい蝋燭をともしている。

## 八 蘭

僕は時々狭い庭を歩き、父の真似まねをして雑草を抜いた。実際庭は水場だけにいろいろの草を生じやすかった。僕はある時冬青もちの木の下に細い一本の草を見つけ、早速それを抜きすててしまった。僕の所業を知った父は「せつかくの蘭らんを抜かれた」と何度も母にこぼしていた。が、格別、そのために叱しかられたという記憶は持っていない。蘭はどこでも石の間に特に一、二茎けい植いえたものだった。

## 九 夢中遊行

僕はそのころも今のように体からだの弱い子供だった。ことに便秘べんぴしさえすれば、必ずひきつける子供だった。僕の記憶に残っているのは僕が最後にひきつけた九歳の時のことである。僕は熱もあったから、床の中に横たわったまま、伯母おばの髪ながを結うのを眺ながめていた。そのうちになにかひきつけたとみえ、寂さびしい海辺うみべを歩いていた。そのまた海辺には人間よりも化け物に近い女が一人、腰巻き一つになったなり、身投げをするために合掌あがましていた。それは「妙々車みょうまぐるま」という草双紙くさごしの中の插画さしえだったらしい。この夢うつつの中の景色だけはいまだにはつきりと覚えている。正気になった時のことは覚えていない。

## 一〇 「つうや」

僕がいちばん親しんだのは「てつ」ののちにいた「つる」である。僕の家はそのころから経済状態が悪くなったとみえ、女中もこの「つる」一人ぎりだった。僕は「つる」のことを「つうや」と呼んだ。「つうや」はあたりまえの女よりもロマンティック趣味に富んでいたであろう。僕の母の話によれば、法界節ほうかいぶしが二、三人編み笠あみがさをかぶって通るのを見ても「敵討ちかたきうでしょうか？」と尋ねたそうである。

## 一一 郵便箱

僕の家うちの門かどの側そばには郵便箱が一つとりつけてあった。母や伯母おばは日の暮れになると、かわるがわる門の側へ行き、この小さい郵便箱の口から往来の人通りを眺めたものである。封建時代らしい女の気もちは明治三十二、三年ころにもまだかすかに残っていたであろう。僕はまたこういう時に「さあ、もう雀色すずめいろどき時ときになったから」と母の言ったのを覚えてい



る。雀色時という言葉はそのころの僕にも好きな言葉だった。

## 一二 灸

僕は何かいたずらをする、必ず伯母おばにつかまっては足の小指きゆうに灸きゆうをすえられた。僕に最も怖おそろしかつたのは灸お灸の熱あつさそれ自身おんよりも灸お灸をすえられるということである。僕は手足をばたばたさせながら「かちかち山やまだよう。ぼうぼう山やまだよう」と怒鳴おどったりした。これはもちろん火あがつくところから自然ぜんぜんと連れん想そうを生じたのであろう。

## 一三 剥製の雉

僕の家うちへ来る人々ひとの中に「お市いちさん」という人があつた。これは代地だいちかどこかにいた柳派りゅうの「五ごりん」のお上かみさんだった。僕はこの「お市いちさん」にいろいろの画本えほんや玩具おもちゃなどを貰もらった。その中でも僕を喜よろこばせたのは大きい剥製はくせいの雉きじである。

僕は小学校を卒業する時、その尾羽根おしうねの切れかかった雉きじを寄附よそしていったように覚えて

いる。が、それは確かではない。ただいまだにおかしいのは雉の剥製を貰った時、父が僕に言った言葉である。

「昔、うちの隣にいた×××××（この名前は覚えていない）という人はちようど元日のしらしら明けの空を白い鳳凰ほうおうがたった一羽、中洲なかずの方へ飛んで行くのを見たことがあると言っていたよ。もつともでたらめを言う人だったがね」

#### 一四 幽霊

僕は小学校へはいつていたころ、どこの長唄ながうたの女師匠は亭主の怨霊おんりょうにとりつかれているとか、この仕事師のお婆さんばあは嫁の幽霊に責められているとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それをまた僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしていた「おてつきん」という婆さんである。僕はそんな話のためか、夢とも現うつともつかぬ境にいろいろの幽霊に襲われがちだった。しかもそれらの幽霊はたいていは「おてつきん」の顔をしていた。

#### 一五 馬車

僕が小学校へはいらぬ前、小さい馬車を驢馬ろばに牽ひかせ、そのまた馬車に子供を乗せて、町内をまわる爺じいさんがあつた。僕はこの小さい馬車に乗つて、お竹倉や何かを通りたかつた。しかし僕の守もりをした「つうや」はなぜかそれを許さなかつた。あるいは僕だけ馬車へ乗せるのを危険にでも思つたためかもしれない。けれども青い幌ほろを張つた、玩具おもちゃよりもわずかに大きい馬車が小刻みにことこと歩いているのは幼目にもハイカラに見えたものである。

## 一六 水屋

そのころはまた本所ほんじよも井戸の水を使つていた。が、特に飲用水だけは水屋の水を使つていた。僕はいまだに目に見えるように、顔の赤い水屋の爺じいさんが水桶みずおけの水を水甕みずがめの中へぶちまける姿を覚えている。そう言えばこの「水屋さん」も夢ゆめ現ゆめうつの境に現われてくる幽霊の中の一人だつた。

## 一七 幼稚園

僕は幼稚園へ通いだした。幼稚園は名高い回向院えこういんの隣の江東小学校の附属である。この幼稚園の庭の隅すみには大きい銀杏いちょうが一本あった。僕はいつもその落葉を拾い、本の中に挟はさんだのを覚えている。それからまたある円顔まるがおの女生徒が好きになったのも覚えている。ただいかにも不思議なのは今になって考えてみると、なぜ彼女を好きになったか、僕自身にもはつきりしない。しかしその人の顔や名前はいまだに記憶に残っている。僕はつい去年の秋、幼稚園時代の友だちに遇あい、そのころのことを話し合った末、「先方でも覚えてるかしら」と言った。

「そりや覚えていないだろう」

僕はこの言葉を聞いた時、かすかに寂しい心もちがした。その人は少女に似合わない、萩はぎや芒すすきに露の玉を散らした、袖そでの長い着物を着ていたものである。

## 一八 相撲

相撲すもうもまた土地がらだけに大勢近所に住まっていた。現に僕の家の裏うちの向こうは年寄りの峯岸みねぎしの家だったものである。僕の小学校にいた時代はちやうど常陸山ひたちやまや梅ヶ谷の全盛を極めた時代だった。僕は荒岩亀之助が常陸山を破つたため、大評判になったのを覚えている。いったいひとり荒岩に限らず、国見山でも逆鉾さかほこでもどこか錦絵にしきえの相撲に近い、男ぶりの人に優れた相撲はことごとく僕の鼻肩ひいきだった。しかし相撲というものは何か僕にはばくぜんとした反感に近いものを与えやすかった。それは僕が人並みよりも体からだが弱かつたためかもしれない。また平生見かける相撲が——髪を藁束わらたば束ねにした禪ぜんどしかつぎが相撲すもう膏こうを貼はっていたためかもしれない。

## 一九 宇治紫山

僕の一家は宇治紫山うじしざんという人に——中節いちちゆうぶしを習っていた。この人は酒だの遊芸だのにお蔵前の札差しの身しんしやう上じやうをすっかり費やしてしまつたらしい。僕はこの「お師匠さん」の酒の上の悪かつたのを覚えている。また小さい借家かきやにいても、二、三坪の庭に植木屋を入れ、冬などは実を持つた青木の下に枯れ松葉を敷かせたのを覚えている。

この「お師匠さん」は長命だった。なんでも晩年味噌みそを買いに行き、雪上がりの往来で転んだ時にも、やっと家うちへ帰つてくると、「それでもまあ禪ぜんだけ新しくつてよかった」と言つたそうである。

## 二〇 学問

僕は小学校へはいつた時から、この「お師匠さん」の一人息子むすこに英語と漢文と習字とを習つた。が、どれも進歩しなかつた。ただ英語はTやDの発音を覚えたくらいである。それでも僕は夜になると、ナシヨナル・リイダアや日本外史をかかえ、せつせと相生町あいおいちよう二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。It is a dog——ナシヨナル・リイダアの最初の一行はたぶんこういう文章だったであろう。しかしそれよりはつきりと僕の記憶に残つているのは、何かの拍子に「お師匠さん」の言つた「誰だれとかさんもこのごろじゃ身なりが山さん水すいだな」という言葉である。

## 二一 活動写真

僕がはじめて活動写真を見たのは五つか六つの時だったであろう。僕は確か父といっしよにそういう珍しいものを見物した大川端おおかわばたの二州楼へ行った。活動写真は今のよう大きい幕に映るのではない。少なくとも画面の大きさはやっと六尺に四尺くらいである。それから写真の話もまた今のよう複雑ではない。僕はその晩の写真のうちに魚を釣つつていた男が一人、大きい魚が針にかかったため、水の中へまっさかさまにひき落とされる画面を覚えている。その男はなんでも麦藁帽むぎわらぼうをかぶり、風立った柳や芦あしを後ろに長い釣竿つりざおを手にしていた。僕は不思議にその男の顔がネルソンに近かったような気がしている。が、それはことによると、僕の記憶の間違いかもしれない。

## 二二 川開き

やはりこの二州楼の棧敷さしきに川開きを見ていた時である。大川はもちろん鬼灯提灯ほおずきちようちんを吊つつた無数の船に埋うずまっていた。するとその大川の上にとどど何かの雪崩なだれる音がした。僕のまわりにいた客の中には亀清かめせいの棧敷が落ちたとか、中村楼の棧敷が落ちたとか、い

ろいろの噂うわさが伝わりだした。しかし事實は木橋もつきょうだった両国橋の欄干が折れ、大勢の人々の落ちた音だった。僕はのちにこの椿事ちんじを幻灯か何かに映したのを見たこともあるように覚えている。

### 二三 ダアク一座

僕は当時えこういん回向院の境内にいろいろの見世物を見たものである。風船乗り、大蛇だいじや、鬼の首、なんとか言う西洋人が非常に高い桿さおの上からとんぼを切って落ちて見せるもの、――数え立てていれば際限はない。しかしいちばんおもしろかったのはダアク一座あやつの操り人形である。その中でもまたおもしろかったのは道化どうけた西洋の無頼漢が二人、化けもの屋敷に泊まる場面である。彼らの一人は相手の名前をいつもカリフラと称していた。僕はいまだに花キャベツを食うたびに必ずこの「カリフラ」を思い出すのである。

### 二四 中洲



当時の中洲なかずは言葉どおり、芦あしの茂ったデルタアだった。僕はその芦の中に流れ灌頂かんじょうや馬の骨を見、気味悪がったことを覚えている。それから小学校の先輩に「これはアシかヨシか？」と聞かれて当惑したことも覚えている。

## 二五 寿座

本所ほんじよの寿座ができたのもやはりそのころのことだった。僕はある日の暮れがた、ある小学校の先輩と元町通りを眺ながめていた。すると亜鉛トタンの海鼠板なまこいたを積んだ荷車が何台も通って行った。

「あれはどこへ行く？」

僕の先輩はこう言った。が、僕はどこへ行くか見当も何もつかなかった。

「寿座！ じゃあの荷車に積よんであるのは？」

僕は今度は勢よい好よく言った。

「ブリツキ！」

しかしそれはいたずらに先輩の冷笑を買うだけだった。

「ブリツキ？ あれはトタンというものだ」

僕はこういう問答のため、妙に悄気しよげたことを覚えている。その先輩は中学を出たのち、たちまち肺を犯されて故人になつたとかいうことだった。

## 二六 いじめっ子

幼稚園にはいつていた僕はほとんど誰だれにもいじめられなかつた。もつとも本間ほんまの徳ちやんにはたびたび泣かされたものである。しかしそれは喧嘩けんかの上だった。したがって僕も三度に一度は徳ちやんを泣かせた記憶を持っている。徳ちやんは確か総武鉄道の社長か何かの次男に生まれた、負けぬ気の強い餓鬼大将だった。

しかし小学校へはいるが早いか僕はたちまち世間に多い「いじめっ子」というものにめぐり合った。「いじめっ子」は杉浦誉四郎である。これは僕の隣席にいたから何か口実くじを拵こしらえてはたびたび僕をつねったりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼おおかみに似た犬をけしかけたりもした。（これは今日考えてみれば Greyhound という犬だったであろう）僕はこの犬に追いつめられたあげく、とうとうある畳屋の店へ飛び上がったのを覚えて

いる。

僕は今漫然と「いじめっ子」の心理を考えている。あれは少年に現われたサアド型性欲ではないであろうか？ 杉浦は僕のクラスの中でも最も白皙はくせきの少年だった。のみならずある名高い富豪の妾腹にできた少年だった。

## 二七 画

僕は幼稚園にはいつていたころには海軍将校になるつもりだった。が、小学校へはいつたころからいつか画家志願に変わっていた。僕の叔母おばは狩野勝玉かのうしょうぎよくという芳崖ほうがいの乙弟子おとでしに縁づいていた。僕の叔父おじもまた裁判官だった雨谷うごくに南画を学んでいた。しかし僕のなりたかったのはナポレオンの肖像だのライオンだのを描く洋画家だった。

僕が当時買い集めた西洋名画の写本版はいまだに何枚か残っている。僕は近ごろ何かのついでにそれらの写本版に目を通した。するとそれらの一枚は、樹下に金髪の美人を立たせたウイスキーの会社の広告画だった。

## 二八 水泳

僕の水泳を習ったのは日本水泳協会だった。水泳協会に通ったのは作家の中では僕ばかりではない。永井荷風氏や谷崎潤一郎氏もやはりそこへ通ったはずである。当時は水泳協会も芦の茂った中洲から安田の屋敷前へ移っていた。僕はそこへ二、三人の同級の友達と通って行った。清水昌彦もその一人だった。

「僕は誰にもわかるまいと思つて水の中でウンコをしたら、すぐに浮いたんでびっくりしてしまった。ウンコは水よりも軽いもんなだね」

こういうことを話した清水も海軍将校になったのち、一昨年（大正十三年）の春に故人になった。僕はその二、三週間前に転地先の三島からよこした清水の手紙を覚えている。

「これは僕の君に上げる最後の手紙になるだろうと思う。僕は喉頭結核の上に腸結核も併発している。妻は僕と同じ病気に罹り僕よりも先に死んでしまった。あとには今年五つになる女の子が一人残っている。……まずは生前のご挨拶まで」

僕は返事のペンを執りながら、春寒の三島の海を思い、なんとかいう発句を書いたりした。今はもう発句は覚えていない。しかし「喉頭結核でも絶望するには当たたらぬ」など

という気休めを並べたことだけはいまだにはつきりと覚えている。

## 二九 体刑

僕の小学校にいたころには体刑も決して珍しくはなかった。それも横顔を張りつけるくらいではない。胸ぐらをとつて小突きまわしたり、床の上へ突き倒したりしたものである。僕も一度は擲なぐられた上、習字のお双紙をさし上げたまま、半時間も立たされていたことがあった。こういう時に擲られるのは格別痛みを感じるものではない。しかし、大勢の生徒の前に立たされているのはせつないものである。僕はいつかイタリアのフアツシヨは社会主義にヒマシユを飲ませ、腹下しを起こさせるといふ話を聞き、たちまち薄うすぎたな汚いベンチの上に立った僕自身の姿を思い出したりした。のみならずフアツシヨの刑罰もあるいは存外人には残酷ではないかと考えたりした。

## 三〇 大水

僕は大水にもたびたび出合った。が、幸いどの大水も床の上へ来たことは一度もなかった。僕は母や伯母おばなどが濁り水の中に二尺指にしゃくさしを立てて、一分殖いちぶえたの二分殖ふぶえたのと騒いでいたのを覚えている。それから夜は目を覚さますと、絶えずどこかの半鐘が鳴りつづけていたのを覚えている。

### 三一 答案

確か小学校の二、三年生のころ、僕らの先生は僕らの机に耳の青い藁わら半紙はんしを配り、それへ「かわいと思うもの」と「美しいと思うもの」とを書けと言った。僕は象を「かわいと思うもの」にし、雲を「美しいと思うもの」にした。それは僕には真実だった。が、僕の答案はあいにく先生には気に入らなかった。

「雲などはどこが美しい？ 象もただ大きいばかりじゃないか？」

先生はこうたしなめたのち、僕の答案へ×印をつけた。

加藤清正は相生町二丁目の横町に住んでいた。と言つてももちろん鎧武者ではない。ごく小さい桶屋だつた。しかし主人は標札によれば、加藤清正に違いなかつた。のみならずまだ新しい紺暖簾の紋も蛇の目だつた。僕らは時々この店へ主人の清正を覗きに行つた。清正は短い鬚を生やし、金槌や鉋を使つていた。けれども何か僕らには偉そうに思われてしかたがなかつた。

### 三三 七不思議

そのころはどの家もランプだつた。したがつてどの町も薄暗かつた。こういう町は明治とは言い条、まだ「本所の七不思議」とは全然縁のないわけではなかつた。現に僕は夜学の帰りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪の向こうの莫迦囉しを聞いたのを覚えてゐる。それは石原か横綱かにお祭りのあつた囉しだつたかもしれない。しかし僕は二百年來の狸の莫迦囉しではないかと思ひ、一刻も早く家へ帰るようにせつせと足を早めたものだつた。

## 三四 動員令

僕は例の夜学の帰りに本所警察署の前を通った。警察署の前にはいつもと変わり、高張り提灯ちようちんが一對ともしてあった。僕は妙に思いながら、父や母にそのことを話したが、誰も驚かなかつた。それは僕の留守るすの間に「動員令発せらる」という号外うちが家にも来ていたからだつた。僕はもちろん日露戦役に関するいろいろの小事件を記憶している。がこの一對の高張り提灯あざやほど鮮かに覚えているものはない。いや、僕は今日でも高張り提灯を見るたびに婚礼や何かを想像するよりもまず戦争を思い出すのである。

## 三五 久井田卯之助

久井田ひさいだという文字は違っているかもしれない。僕はただ彼のことをヒサイダさんと称していた。彼は僕の実家にいる牛乳配達ひなの一人だつた。同時にまた今日ほどたくさんいない社会主義者の一人だつた。僕はこのヒサイダさんに社会主義の信条を教えてもらった。そ



れは僕の血肉には幸か不幸か滲み入らなかつた。が、日露戦争中の非戦論者に悪意を持たなかつたのは確かにヒサイダさんの影響だつた。

ヒサイダさんは五、六年前に突然僕を訪問した。僕が彼と大人同士の社会主義論をしたのはこの時だけである。(彼はそれから何か月もたたずに天城山の雪中に凍死してしまつた)しかし僕は社会主義論よりも彼の獄中生活などに興味を持たずにはいられなかつた。「夏目さんの『行人』」の中に和歌の浦へ行った男と女とがどうとう飯を食う気にならずに膳を下げさせるところがあるでしょう。あすこを牢の中で読んだ時にはしみじみもつた  
 いないと思ひましたよ」

彼は人懐い笑顔をしながら、そんなことも話していったものだつた。

### 三六 火花

やはりそのころの雨上がりの日の暮れ、僕は馬車通りの砂利道を一隊の歩兵の通るのに出合つた。歩兵は銃を肩にしたまま、黙つて進行をつづけていた。が、その靴は砂利と擦れるたびに時々火花を発していた。僕はこのかすかな火花に何か悲壯な心もちを感じた。

それから何年かたったのち、僕は白柳秀湖氏の「離愁」とかいふ小品集を読み、やはり歩兵の靴から出る火花を書いたものを発見した。（僕に白柳秀湖氏や上かみつかさ司小剣氏の名を教えたものもあるいはヒサイダさんだったかもしれない）それはまだ中学生の僕には僕自身同じことを見ていたせい、感銘の深いものに違いなかった。僕はこの文章から同氏の本を読むようになり、いつかロシアの文学者の名前を、——ことにトウルゲネフの名前を覚えるようになった。それらの小品集はどこへ行つたか、今はもう本屋でも見かけたことはない。しかし僕は同氏の文章にいまだに愛惜を感じている。ことに東京の空を罩こめる「鳶色とびいろの靄もや」などという言葉に。

### 三七 日本海海戦

僕らは皆日本海海戦の勝敗を日本の一大事と信じていた。が、「今日晴朗なれども浪高なみし」の号外は出ても、勝敗は容易にわからなかった。するとある日の午飯ひるめしの時間に僕の組の先生が一人、号外を持って教室へかけこみ、「おい、みんな喜べ。大勝利だぞ」と声をかけた。この時の僕らの感激は確かにまた国民的だったのであろう。僕は中学を卒業し

ない前に国木田独歩の作品を読み、なんでも「電報」とかいう短篇にやはりこういう感激を描いてあるのを発見した。

「皇国の興廢この一挙にあり」云々うんぬんの信号を掲げたということはおそらくはいかなる戦争文学よりもいつそう詩的な出来事だったであろう。しかし僕は十年のち、海軍機関学校の理髪師に頭を刈ってもらいながら、彼もまた日露の戦役に「朝日」の水兵だった関係上、日本海海戦の話をした。すると彼はにこりともせず、きわめてむぞうさにこう言うのだった。

「なに、あの信号は始終でしたよ。それは号外にも出ていたのは日本海海戦の時だけです  
が」

### 三八 柔術

僕は中学で柔術を習った。それからまた浜町はまちようがし河岸の大竹という道場へもやはり寒稽かんげい古こなどに通ったものである。中学で習った柔術は何流だったか覚えていない。が、大竹の柔術は確か天真揚心流だった。僕は中学の仕合いへ出た時、相手の稽古着へ手をかける

が早いか、たちまちみごとな巴ともえな投げを食い、向こう側に控えた生徒たちの前へ坐すわつていたことを覚えている。当時の僕の柔道友だちは西川英次郎一人だった。西川は今とつとりは鳥取の農林学校か何かの教授をしている。僕はそのうちも秀才と呼ばれる何人かの人々に接してきた。が、僕を驚かせた最初の秀才は西川だった。

### 三九 西川英次郎

西川は渾名あだなをライオンと言った。それは顔がどことなしにライオンに似ていたためである。僕は西川と同級だったために少なからず啓発を受けた。中学の四年か五年の時に英訳の「獵人日記」だの「サツフォオ」だのを読みかじったのは、西川なしにはできなかったであろう。が、僕は西川には何も報いることはできなかった。もし何か報いたとすれば、それはただ足がらをすくって西川を泣かせただけであろう。

僕はまた西川といっしょに夏休みなどには旅行した。西川は僕よりも裕福だったらしい。しかし僕らは大旅行をしても、旅費は二十円を越えたことはなかった。僕はやはり西川といっしょに中里介山氏の「大菩薩峠だいぼさつとうげ」に近い丹波山という寒村に泊まり、一等三十五

銭という宿賃を払ったのを覚えている。しかしその宿は清潔でもあり、食事も玉子焼などを添えてあった。

たぶんまだ残雪の深い赤城山へ登った時であろう。西川はごごみかげんに歩きながら、急に僕にこんなことを言った。

「君は両親に死なれたら、悲しいとかなんとか思うかい？」

僕はちよつと考えたのち、「悲しいと思う」と返事をした。

「僕は悲しいとは思わない。君は創作をやるつもりなんだから、そういう人間もいるということを知っておくほうがいいかもしれない」

しかし僕はその時分にはまだ作家になろうという志望などを持っていたわけではなかった。それをなぜそう言われたかはいまだに僕には不可解である。

#### 四〇 勉強

僕は僕の中学時代はもちろん、復習というものをしたことはなかった。しかし試験勉強はたびたびした。試験の当日にはどの生徒も運動場でも本を読んだりしている。僕はそれ

を見るたびに「僕ももつと勉強すればよかった」という後悔を伴った不安を感じた。が、試験場が出るが早いか、そんなことはけろりと忘れていた。

#### 四一金

僕は一円もらの金を貰い、本屋へ本を買いに出かけると、なぜか一円の本を買ったことはなかった。しかし一円出しさえすれば、僕が欲しいほと思う本は手にはいるのに違いなかった。僕はたびたび七十銭か八十銭の本を持ってきたのち、その本を買ったことを後悔していた。それはもちろん本ばかりではなかった。僕はこの心もちの中に中産下層階級を感じている。今日でも中産下層階級の子弟は何か買ひものをするたびにやはり一円持っているもの、一円をすつかり使うことにしゅんじゅん 逡巡してはいないであろうか？

#### 四二 虚栄心

ある冬に近い日の暮れ、僕は元町通りを歩きながら、突然往来の人々が全然僕を顧みな

いのを感じた。同時にまた妙に寂しさを感じた。しかし格別「今に見ろ」という勇気の起こることは感じなかった。薄い藍色に澄み渡った空には幾つかの星も輝いていた。僕はこれらの星を見ながら、できるだけ威張って歩いて行つた。

#### 四三 発火演習

僕らの中学は秋になると、発火演習を行なつたばかりか、東京のある聯隊れんたいの機動演習にも参加したものである。体操の教官——ある陸軍大尉はいつも僕らには厳然げんぜんとしていた。が、実際の機動演習になると、時々命令に間違いを生じ、おお声に上官に叱しかられたりしていた。僕はいつもこの教官に同情したことを覚えていた。

#### 四四 渾名

あらゆる東京の中学生が教師につける渾名あだなほど刻薄に真実に迫るものはない。僕はあいく今日ではそれらの渾名を忘れている。が、今から四、五年前、僕の従姉いとこの子供が一人、

僕の家へ遊びに来た時、ある中学の先生のことを「マツポんがどうして」などと話していた。僕はもちろん「マツポん」とはなんのことかと質問した。

「どういふことも何もありませんよ。ただその先生の顔を見ると、マツポんという気もちがするだけですよ」

僕はそれからしばらくののち、この中学生と電車に乗り、偶然その先生の風<sup>ふう</sup>豊<sup>ほう</sup>に接した。するとそれは、——僕もやはり文章ではどういふ真実を伝えることはできない。つまりそれは渾名どおり、正<sup>まさ</sup>に「マツポん」という感じだった。

（大正十五年三月—昭和二年一月）



## 青空文庫情報

底本：「河童・玄鶴山房」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年11月30日改版初版発行

1979（昭和54）年9月20日改版4版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：一色伸子

校正：小林繁雄

2001年1月29日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 追憶

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>